

椰子の実会（1909-1913）：中学生の絵画サークルについて

COCOA-NUT Club（1909-1913）: A Study of an Art Club of High School Students:

遠藤 知恵子
(Chieko ENDO)

1. 本稿の主題

画家の武井武雄（1894-1983）は長野県立諏訪中学校2年生のとき、友人と洋画研究グループ「椰子の実会」を結成する。武井の作品を多数収蔵する長野県岡谷市のイルフ童画館には、椰子の実会会員の集合写真と、椰子の実会の印が捺された「椰子の実会規定」、そして、椰子の実会で発行したかどうかは定かではないものの、同会との関連が推測される冊子が保管されている。武井は子ども向けの出版物を数多く手がけ、木版画や造本芸術などでも数多くの作品を残した画家だが、椰子の実会で活動していた当時は一人の生徒として、友人たちと楽しみながら絵を描いたり、互いの作品を批評しあったり、あるいは、雑誌などを通じて洋画についての知識を吸収したりしていた。従って、「椰子の実会」関連資料は武井武雄関連資料であると同時に、当時の旧制中学の生徒たちがどのように余暇を過ごしていたかを知り、さらに、この頃の美術雑誌の受容の様態や、生徒たちの間で美術趣味がどのように形成されていったのかを理解する手がかりともなり得る。

本稿は、明治末期から大正初期にかけて活動していたこの椰子の実会について、同会会員だった生徒たちの活動の様子を叙述することを主な目的とする。イルフ童画館所蔵の武井家の遺品から、生徒たちの自主的な活動の一端を読み取りたい。

2. 椰子の実会について

まずは「椰子の実会規定」【図版1】によって会の活動内容を確認する。「椰子の実会規定」は、半紙三枚に記され、紙縋で綴じた形跡（紙縋とそれを通したらしい穴）がある。「明治四拾貳年拾貳月」（1909年12月）と日付入りで活動開始を宣言するとともに、細かな役割分担やこの会の活動内容を記している。「椰子の実会規定」全文は以下の通りである。

椰子の実会規定

△本会は四拾貳年十二月二日諏中の一週に起り椰子の実会と称す。

△洋画を研究するを以て目的となす。

△会計、研究購読、雑誌の諸部を置く

△会計部、立木茂之にあたる

2 椰子の実会（1909-1913）：中学生の絵画サークルについて

○会費拾銭となし毎月十日迄に会計員に出すべし（但し増費の時は此の限ぎりにあらず）

○各部費用を要〔「用」を朱で訂正〕する時は会計部に共議の上事をなす。

△雑誌部、武井武雄雑誌編輯部員があたる

○毎月一日一回雑誌椰子の実を刊行す。

○用紙画学紙〔鉛筆で絵を描くために使う洋紙。画用紙〕又〔「は」を朱で付け足し〕其他の洋画用紙となし普通画用紙、ハツ切り〔「大型」を朱で付け足し〕とす 少ない〔「小さい」の誤記か〕画面は規定の用紙に貼付すべし

○一人二葉以上とす

○種類一切洋画、画題等は各自任意 但し時に応じ題を課す事あるべし。

○毎月二十五日を以てメ切期日となす

○絵の一枚毎に画題及雅号絵の種類（水彩、木炭、油絵 チョーク。コンテ、擦筆、パステル、ペン等）等を記入せる紙片を添ふべし〔「添」の字を朱でなざる〕

○感想、研究談、雑話、ぬき書き、苦心談、求題（模写は原画作者の指名を明にすべし）等は半紙又は罫紙に楷書にて記し投ずべし。

○紙数は一人三頁を以て標準となす

○編輯人は草稿を訂正清書なして編輯す。

○前号の批評感想は次号紙上になすものとす。

○他の書籍にて感じたる事は抜き書きとして投ずべし

講読部 増沢廉平之にあたる

○定期刊行の洋画雑誌（方寸、美術新報）を取りて廻覧す〔ママ〕

○有益なる洋画書籍を購ふ

○みづゑは毎月日新堂より寄せらる

○各自寄せらるもよし

研究部 篠遠好人 笠原一行 河西達夫 之れにあたる。

○毎月二回或は三回土曜放課後教室にて各自の作品批評、感想研究談等をなし希望討論をなす。

○会合日。研究材料等は係員之を定む

○教師に談話を請ふ。

○写生遠足等は係員の準備により休日を利用し一夜泊、一日等にてなすべし

○写生旅行を試みに企画す

○日曜を利用し、各会員苦心の作数十葉を陳列なし教師に批評等級を請ふ。

○優秀なる作は会の所有として蔵す

○参考品は研究部の指定にて求む

各部報告は毎月椰子の実誌〔「紙」と朱で訂正〕上を以てす

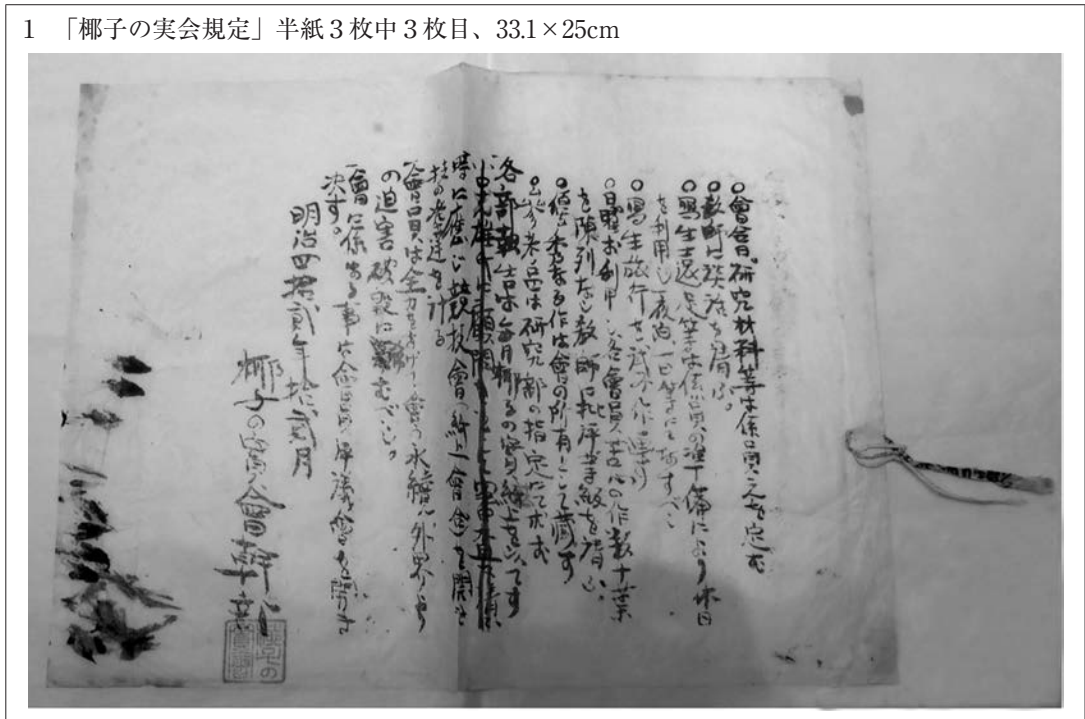
〔「小口光雄氏に顧問として審査を請ふ」と書いた上から見せ消ち〕

時に応じ競技会（紙上会合）を開き技の発達を計る
 会員は全力をあげて会の永續、外界よりの迫害破毀に務〔書き損じ、上から朱で訂正〕むべし。
 会に係わる事は会員評議会を開き決す。

明治四拾貳年拾貳月

椰子の実会幹部

1 「椰子の実会規定」半紙3枚中3枚目、33.1×25cm



「椰子の実会規定」は、会の結成日とともに、活動目的・役割分担・活動内容・意思決定の方法などを明記したものである。会費を集めて管理する「会計部」、会誌である雑誌『椰子の実』の原稿を取りまとめて発行する「雑誌部」、洋画に関する知識を得るための雑誌や書籍を集める「購読部」、作品批評や写生遠足・写生旅行、作品展示（陳列）を取り仕切ったり参考作品を示したりする「研究部」が会の活動を担う。会費は10銭。洋画雑誌や洋画書籍の共同購入や『椰子の実』発行にかかる費用は、会計部に相談する。この規定には、「みづゑは毎月日新堂より寄せらる」と入手先まで明記されているが、『みづゑ』の定価は第56号（1909年11月）の奥付によると「一冊送料共金拾八銭」とあり、「一時に金拾五円以上を払込むものには本会会友として日本水彩画会会友と同一の待遇を与へ永久本誌の無料配布を受くる事を得」と記されている。『みづゑ』第64号（1910年7月）の「日本水彩画会新会友」で、「長野県諏訪通学校内 椰子の実会」が紹介されている。後述するように、この会を結成した直後に会員の間で回し読みされた回章では、『みづゑ』第56号掲

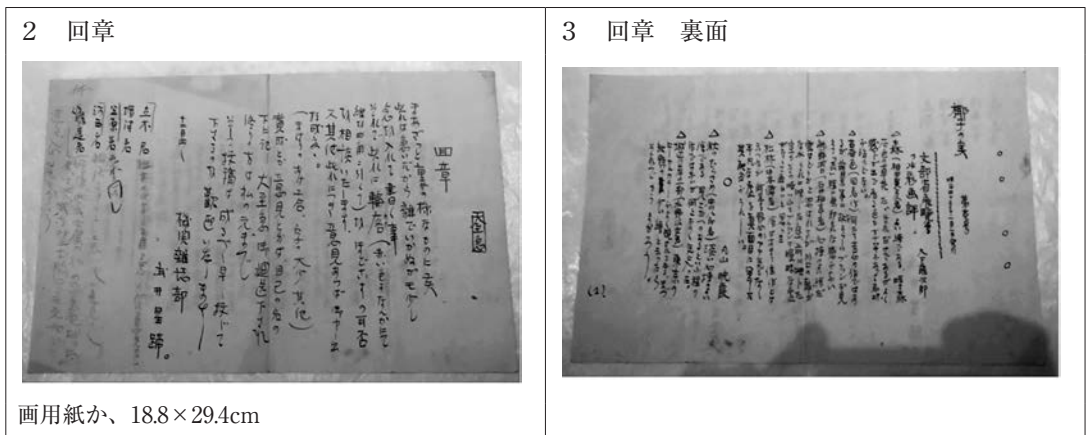
載記事を使って雑誌『椰子の実』の誌面レイアウトを相談している。

「椰子の実会」では活動内容や活動の頻度が細かに決められている。会員たちは雑誌『椰子の実』に定期的に作品を投稿し、相互に批評し合い、研究会を開き、時には教師の批評を受けたり、絵を描くために遠出をしたりするということが明文化されていた。「写生旅行を試みに企画す」の一文の中に現れる「試みに」という言葉にも表れているように、ここに挙げられている活動内容は、会に参加している生徒たちがこれからしてみたいことのリストでもある。

「椰子の実会規定」の末尾にある「会員は全力をあげて会の永続、外界よりの迫害破毀に務むべし」という一文は、この会の活動が、少年たちの自主性に基づくものだったことを端的に示している。学課とは別に行う活動であり、野球やスケートなどのスポーツと違い⁽¹⁾、洋画研究のサークルは、周囲の大人たちから奨励される活動というわけではない。周囲の大人たちの理解を得られず活動を妨げられたりするかも知れないという不安を抱きながらの結成だったのだろう。この「椰子の実会規定」を作成しながら、「椰子の実会」の生徒たちはそうした障害も予め想定し、自分達の活動内容を細かに考え計画していたことが読み取れる。

3. 雑誌『椰子の実』について

椰子の実会結成から2日後、『椰子の実』第1号を準備する中で、雑誌部担当の武井が会員に回した文書がある。「大至急」「回章」と記され、会員の間を回し読みされた形跡がある。



おそらく、この文書が回される以前に、『椰子の実』誌に関する話を会員同士でしていたものと思われる。表側【図版2】に記されたメッセージ本文は、「まあざっと裏の様なものに候」と最初から用件で始まり、裏面に書き写した雑誌『椰子の実』の誌面のレイアウト案【図版3】を示している。裏面に書き写されたこの批評文は、『みづゑ』第56号（1909年11月）掲載の太田藤次郎「文部省展覧会の水彩画」という批評文から、水彩画の作者ごとに改行するなどの変更を加えて書き写

したものである。この回章で話題となっているのは、批評の中身ではなく、それを記す形式である。「それで此れに輪■ [不明な文字。「カク」と振り仮名が付される。「輪廓」の意か] (赤い色かなんかにて線を四角に引く事)をほどこすの可否を相談いたします」と、誌面のレイアウトについて相談しているのである。表側の本文末尾には、「立木君」「増沢君」「笠原君」「河西君」「篠遠君」と会員の名前が記されており、本文で「賛成とか意見とかは自己の名の下に記し、大至急御廻し下され終りの方は私の元まで」と、意見を求める旨を伝えている。裏面の方は、引用元は大下の記事であるにもかかわらず丸山晚霞の名が途中で記されていたり、大下が「まづ欠点の少ない絵であらう」(14)と結んでいた水野以文〈城辺河岸の一部〉に対する批評を「まづ欠点の少ない絵と云ったらそれでもうよかろう」に変更するなどの異同がある。掲載する際の様式について意見を募ることが目的なので、それほど正確な引用でなくても構わなかったのだろう。この武井からの要請を受けて会員たちがそれぞれに書いた意見は、判読不能の文字が多く正確に読み取ることは困難だが、「輪■は■■■■■■佳と思ふ他に意見なし」(立木)、「立木に同じ」(笠原)、「輪■■■■■■■■■■■と思ふ■■■■意見なし」(河西)、「■■■、此の式は僕の初めの意見だった、僕は此の式を望む間にこまゑなども■■■■、入れるもよからう」(篠遠)といったように、それぞれの考えを書き込んでいる⁽²⁾。会員の意見を取り入れ、合意形成を図りながら活動を始めていたことが、こうしたやり取りから垣間見られる。

そうして出来上がった椰子の実会の機関誌『椰子の実』は、中身のページの所在が不明で誌面は確認できないが、表紙と見られる紙片などがイルフ童画館に保管されている【図版4～9】。

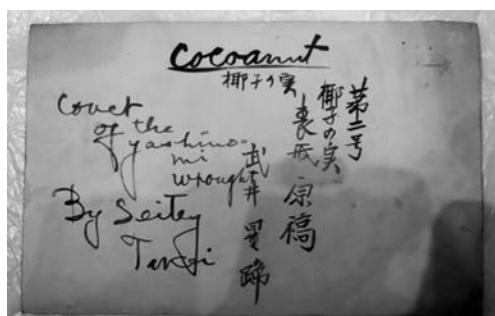
『椰子の実』2号の表紙と考えられる紙片【図版4】には、裏面にタイトルと「武井星蹄」という署名がある【図版5】。星蹄は雑誌部担当の武井武雄が使っていた雅号である。他の第3号・第4号には署名がない。裏面に「第二号 椰子の実 表紙原稿」と記されているため表紙とすることを意図して描いたことは間違いのないものの、これをどのように綴じていたのかはこの紙片を見ただけでは分からない。表側の右端に、表紙や中身の頁を綴じて結ぶリボンを描いており、凝ったデザインではある。「椰子の実」の題字をおさめた円が中央に配置されており、縁の中にはたわわに実をつけた椰子の木が描かれ、椰子の木の下には赤い衣装を纏った人物の姿がある。円の右下には手がきの落款が見られ、表紙の上部には「COCOA-NUT」と英語で雑誌名を併記している。円の中の「椰子の実」の文字は白抜きとなっており、円の外側の余白とこの文字が繋がっている。絵だけではなく文字も表紙の構成要素として同等に扱い、画面全体でまとまりのある一つのイメージを作ろうとしている。購読部で購入することとしていた『方寸』『美術新報』『みづゑ』といった雑誌でさまざまな手本を見ながら表紙デザインを考えていたのかもしれない。

4 『椰子の実』 第2号表紙か



(表) 19×29.3cm

5 『椰子の実』 第2号表紙か



(裏)

6 『椰子の実』 第3号表紙か



(表) 19.1×29.3cm

7 『椰子の実』 第3号表紙か



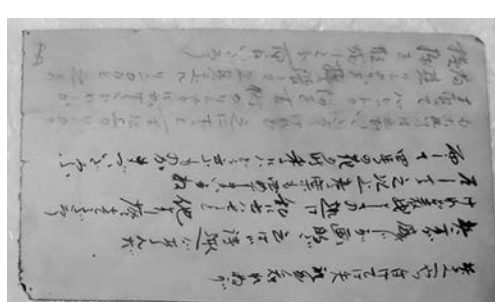
(裏)

8 『椰子の実』 第4号表紙か



(表) 10.8×18.1cm

9 『椰子の実』 第4号表紙か

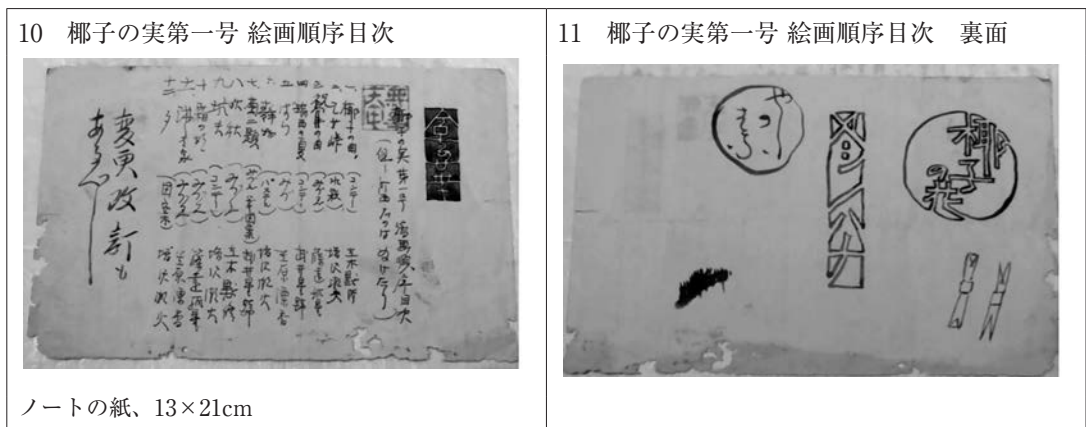


(裏)

「椰子の実会」というこの会の名称について、1901年に島崎藤村が発表した詩に、「椰子の実」と題するものがある。椰子の実会の会員たちは、会の結成時に藤村の詩を思い浮かべていたのだろうか。残された資料から、藤村の「椰子の実」からの影響を読み取ることは難しい。ただ、椰子(ココヤシ)は熱帯に多く分布する植物であり、その実は潮の流れに運ばれ、辿り着いた先の土地に根を下ろすこともある。一般論として考えるならば、遠く離れた国や地域、もしくは旅への憧れを示すモチーフと見ることができる。刊行年月を示す「1 FEB. 1910」の「FEB.」は、アクサンテギュ

は省かれているがフランス語の2月（février）の略だろう。熱帯の植物と異国の衣装に身を包んだ人物、それに、英語表記とフランス語表記の混在などを考え合わせるならば、特定の作品や特定の地域を思い浮かべて描いたというよりは、学校や家庭などの身近な範囲で完結している小さな世界とは違う、想像上のどこか遠い世界を描こうとしていたのではないだろうか。

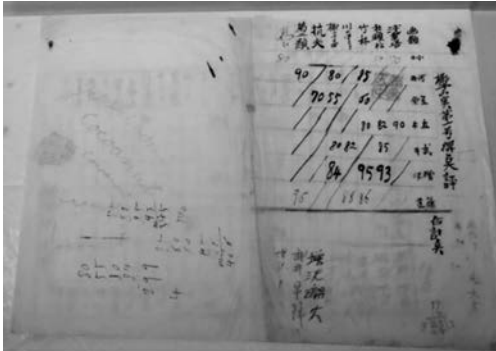

『椰子の実』第3号の表紙と思われる紙片【図版6】には、裏面に、紙を縦にして描いた、無署名の風景画【図版7】がある。署名はないものの落款はあるため、会員同士ではこれが誰の作品であるかは分かったのだろう。第4号表紙と見られる紙片【図版8】は他の2枚と比べて紙が小さい。この紙片そのものの使用目的は表紙ではなかった可能性はあるが、少なくとも雑誌の表紙デザインであることは間違いない。パレットの中に題字を書いてデザインを工夫している点や、同様に異国情緒の感じられるモチーフ（砂漠、ピラミッド、椰子の木）を選択している点では、第2号表紙と共通する気分が表れている。また、裏面にはこの表紙図案に対する批評と思しい文章が書き込まれている【図版9】。第3号と第4号の紙片には四隅に画鋏の跡があるため、壁に貼って展示していたかもしれないが、表側の画鋏跡の周りに絵の具が塗られていないことから、画板に画鋏で留めておいて描くなど、制作過程で空いた穴である可能性もある。



「椰子の実第一号 絵画順序目次」と記された紙片【図版10】にはコンテ、水彩、パステル、みづゑ（水彩画の意か）といった画材とともに作品タイトル、作者名が記されている。ここにリストアップされている12点の作品中、2点が図案（デザイン）である。絵画順序目次の裏面には「椰子の花」の文字を漢字仮名まじり、ひらがな表記、カタカナ表記でそれぞれ図案化したものが描かれている【図版11】。植物の多くは実を付ける前に花を咲かせる。表側の絵画順序目次の末尾に「変更改訂もあるべし」と記されていることや、右端の図案化された文字が「ヤ子の華」と読めなくもないことから、この「椰子の実第一号 絵画順序目次」は『椰子の実』第1号発行前に作成したものなのだと推測できる。雑誌『椰子の実』発行の前段階で「椰子の花」と称して掲載順を告知する。これは

実の前に花が咲くという主旨の洒落だったのだろう。凝りすぎて読みにくい図案文字や、理解に時間のかかる洒落などからは、かえって雑誌発行に対する思いの強さを窺い知ることができる⁽³⁾。

また、雑誌『椰子の実』は、作品を載せて互いに見せ合うだけではなく、相互批評をすることも目的としていたことが、次の得点表から窺える。

| | |
|--|---|
| <p>12 椰子の実第一号得点表</p>  <p>半紙、24.7×33.2cm</p> | <p>13 第二号得点表</p>  <p>半紙にマス目、24.7×33.2cm</p> |
|--|---|

第1号の得点表【図版12】は表の左側に筆算の跡があり、人に見せることを意識して書いたようには見えないが、第2号の得点表【図版13】になると、罫線を利用して表を作成しており、第1号より見やすく、きちんと清書したものと考えられる。

「椰子の実会規則」には「時に応じ競技会（紙上会合）を開き技の発達を計る」という一文がある。雑誌の中身が残っていない以上、「競技会」がどのように行われていたかは想像するしかないが、『椰子の実』掲載作品について会員同士で点数を付け合って競っていた形跡がある。

ここまで【図版1】から【図版13】によって、椰子の実会関連資料を見てきた。次に同会購読雑誌を概観する。

4. 椰子の実会の購読雑誌

「椰子の実会規則」によれば、椰子の実会が購読していた雑誌は先に取り上げた『みづゑ』（1905年7月～1992年6月休刊）のほかに、『方寸』（1907年5月～1911年7月）と『美術新報』（1902年3月～1920年2月）があった。

『みづゑ』は、大下藤次郎（1870-1911）が主催する雑誌で、水彩画の描き方を中心に、初心者向けに解説するという内容のものだった。のちに、美術全般を扱うようになっていくのだが、椰子の実会の生徒たちにとっては、水彩画を始めるにあたり、どんな道具が必要か、絵の具はどこの製品がおすすりめか、紙は何を選べば良いかなど、基本から丁寧に教えてくれる格好の教材となったこ

とだろう。加えて、写生のために出かけていった先での笑い話のような楽しみの要素もあり、ラスキンの講演の翻訳も掲載する。読み方によっては、絵画趣味を通じた修養書という趣もある雑誌である。応用美術として図案の描き方も指南し、「中等教員予備試験問題」、「中等教員本試験問題」なども掲載し、さらに、会員が投稿を通じて相互に交流を図る「読者の領分」というページも用意されていた。椰子の実会会員の生徒たちが用いていた画材について、「椰子の実会規則」に例示されていたのは「水彩、木炭、油絵、チョーク、コンテ、擦筆、パステル、ペン等」だが、「椰子の実第一号 絵画順序目次」【図版10】で実際に使っていたことが確認できるのは、コンテ、水彩絵の具、パステルなどである。とくに水彩絵の具はこの目次の半分以上を占めていた。椰子の実会会員にとって、『みづゑ』は参考としやすかったのではないだろうか。

購読雑誌のうち最も短命だった『方寸』は、美術文芸雑誌である。1907年の創刊時の同人は石井柏亭(1882-1958)、森田恒友(1881-1933)、山本鼎(1882-1946)。1908年に平福百穂(1877-1933)、倉田白羊(1881-1938)、小杉未醒(1881-1964)、1909年に織田一磨(1882-1956)、坂本繁二郎(1882-1969)が加わっている。同人による自画自刻自摺の創作版画が数多く掲載されていた。展覧会評や画論、漫画といった記事のほか、北原白秋や木下空太郎(1885-1945)、高村光太郎(1883-1956)らによる寄稿も掲載された。『方寸』同人の年齢は20代の後半から30代の初め頃までと若く、椰子の実会の生徒たちとは年齢が近い。

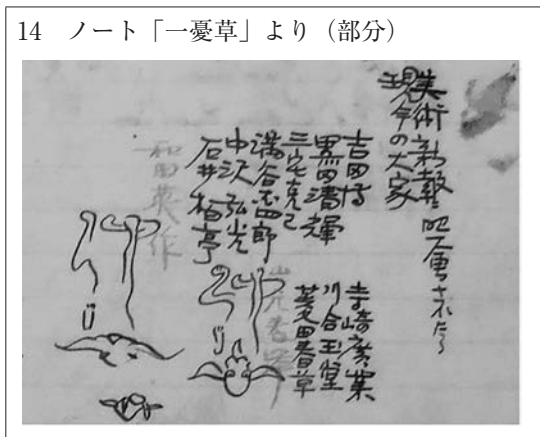
美術評論誌の『美術新報』は、同時代の日本を中心に、世界中の絵画・彫刻・工芸・書など、各分野の記事を豊富な写真版とともに掲載している。日本国内の主要な作家や、海外の美術の動向を知ることができる。椰子の実会会員の一人、武井武雄が使用していたノート「一憂草」【図版14】には、「美術新報ニ照会されたる現今の大家」として、画家の名(インクで吉田博、黒田清輝、三宅克己、満谷国四郎、中沢弘光、石井柏亭、寺崎廣業、川合玉堂、菱田春草。これらの名前や犬もしくは狐らしい生き物の絵の隙間を縫って、鉛筆で山元春挙、和田英作)が記されている。まるで書き取り練習のように文字を連ねるばかりで、これらの画家の作品を雑誌で眺め、どのようなことを考えていたのかはここからは読み取れないが、同時代の有名作家の名前を覚え、最新の知識を仕入れようとするとき、『美術新報』を参考にしていたということは確かである。

会費を出し合い、それぞれに異なる性質の雑誌を購読することで、絵画制作のための技術、知識、批評の方法などを学び取ろうとしていたこと、そうして自分達の学びをデザインするという、課外活動の醍醐味を味わっていたことが雑誌の選び方やノートの文字などから読み取れる。

以上、洋画研究会「椰子の実会」とその機関誌である雑誌『椰子の実』について、1から14までの図版を参照しながら、武井家に残されていた遺品から分かる範囲で述べてきた。その後、椰子の実会の活動がどうなったかを知ることのできる資料は今のところ確認できていない。

椰子の実会は、「椰子の実会規定」に記した通り、活動を続けることができたのだろうか。椰子の実会との関連が推測できる冊子を参考に、生徒たちのそれからを見ておきたい。

14 ノート「一憂草」より（部分）



5. その他の冊子について

武井家の遺品の中には他に、『野の千草 一』や『秋のとばり 二』などと題する、半紙を折って綴じた小冊子が9点ある。草画集として通し番号はあるが、タイトルは1号ごとに異なる。絵と文章はどちらも手がきで、複数の作者の作品を綴じてあり、さらに『秋のとばり 二』、『梢と空と落ち葉と苔と 三』、『蒼い空』、『銀色の籠春の巻 薄命青年画家草画集その七』の末尾には前号の批評や感想のページがあることから、仲間内で回し読みした回覧雑誌だったのではないかと推測される。椰子の実会との関連は不明だが、同会において真面目に勉強する対象である洋画とは異なり、より軽やかに、絵を描くことに興じている。イルフ童画館所蔵の冊子は、次の9点が確認できる。

1. 『野の千草 一』 c.1911年9月、24.8×16.7cm、半紙を折りリボンで綴じる
2. 『秋のとばり 二』 1911年11月3日、24.8×16.7cm、半紙を折り糸で綴じる
3. 『梢と空と落ち葉と苔と 三』 c.1911年、25×17.1cm、半紙を折り糸縫りで綴じる
4. 『雫 No.4』 1912年1月、24.7×16.8cm、半紙を折り糸で綴じる
5. 『蒼い空』 制作年月に関する記載なし。『雫 No.4』の感想が記されており、5番目の冊子と考えられる。
24.5×17.6cm、半紙を折り糸で綴じる
6. 『銀色の籠春の巻 薄命青年画家草画集その七』 1912年4月、24.5×17cm、半紙を折り糸で綴じる
7. 『白き月と白き湖 草画集八 一湖岸会合一』 c.1912年4月、24.5×16.8cm、半紙を折り糸で綴じる
8. 『草画集 第拾一』 1913年1月、24.5×17.1cm、半紙を折り糸縫りで綴じる
9. 『白と春と 大正二年一月号 草画集第拾二』 1913年1月、24.5×17cm、半紙を折り糸で綴じる

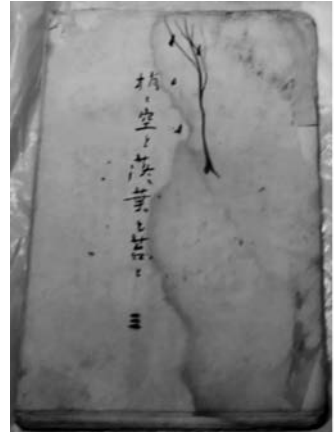
冊子1



冊子2



冊子3



冊子4



冊子5



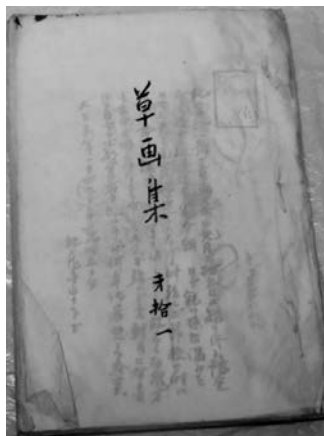
冊子6



冊子7



冊子8



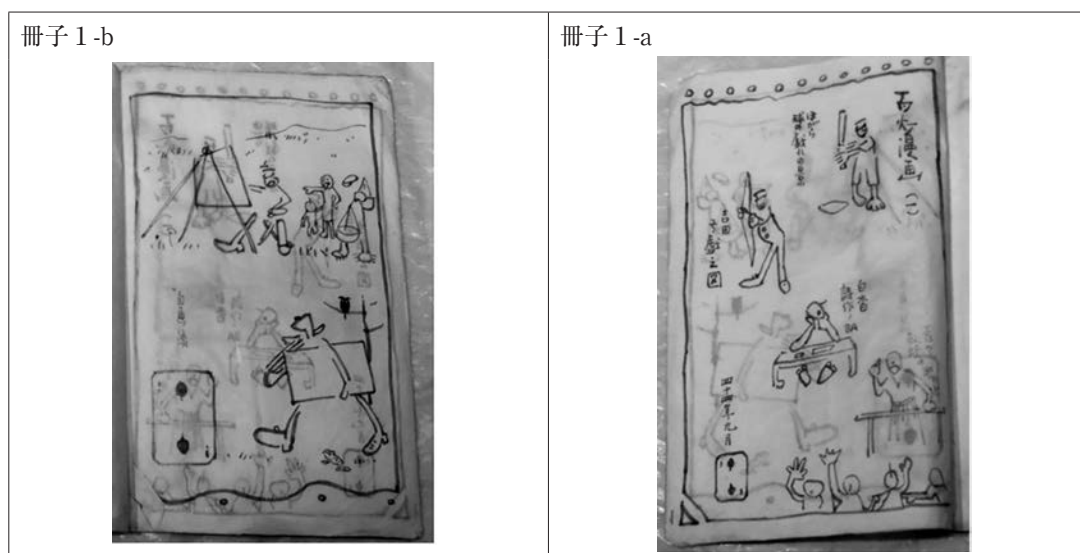
冊子9



9冊とも、先に見た『椰子の実』表紙デザインとは対象的なシンプルな表紙の冊子である。確認できた冊子の発行時期は1911年9月頃から1913年1月までで、この期間に同様の冊子が少なくとも12冊、制作されていたことが分かる。この冊子に収められている「草画」の多くは、墨一色の大まかな筆遣いで人物や風景を捉えており、冊子全体は簡素ながら画集の体裁を取っている。

椰子の実会で雅号の「星蹄」を名乗っていた武井が草画集では「百灯」という俳号を用いていることから分かる通り、全体に、軽みのある戯れに満ちた誌面ではある。しかし、その場限りの適当な遊びというわけでもない。第1号の末尾には『野の千草 一』には「百灯漫画（一）」【冊子1-a/b】があり、この画集を継続して発行し、その中で漫画を連載するという意図が読み取れる。

冊子1より「百灯漫画」（縦書き・右開きの冊子のため、ページの順序はa→bとなる）



この「百灯漫画」では、友人や自分の姿を戯画的に描いている。「ほがら」は野球をし、「吉田」は弓道、「白沓」は詩を捻り出そうと机に向かう【冊子1-a】。自画像では、野外で絵を描いていると後ろから人に覗かれ、道具をしまってどこかへ立ち去るところを描いている【冊子1-b】。

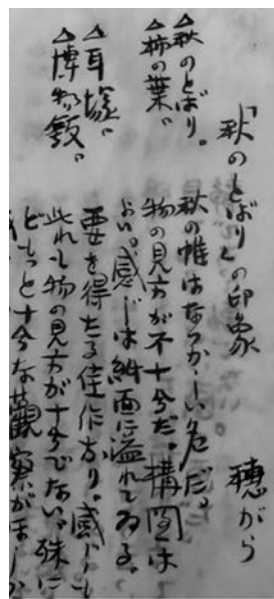
『野の千草 一』への「評」が、『秋のとばり 二』に載っている。一例として、『秋のとばり 二』に収められている「柿の葉をおとす人」【冊子2-a】（作者不明）と、『梢と空と落ち葉と苔と 三』に寄せられた穂がらという人物の評【冊子3-a】とを合わせて見ておきたい。

冊子 2-a 作者不明 〈柿の葉を落とす人〉



(絵の部分のみ拡大)

冊子 3-a 穂がら『秋のとぼり』の印象

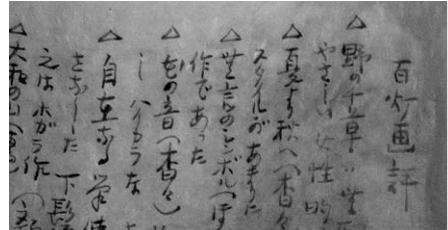
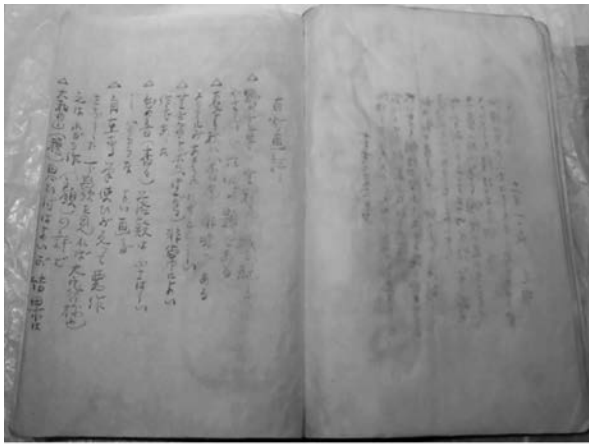


(該当箇所のみ拡大)

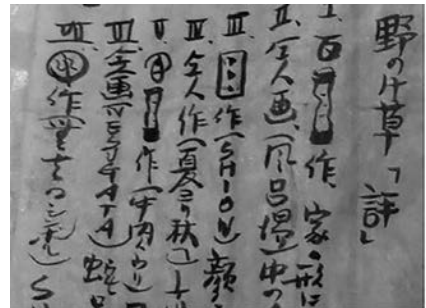
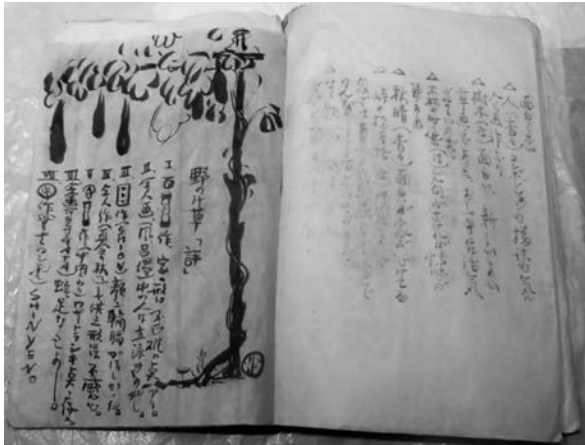
〈柿の葉を落とす人〉は樹上の人を少し距離のある位置に立って見たところを描いている。木には梯子がかかっており、足元には3羽の鶏がいる。この絵に対し、穂がらというペンネームを使う人物は、「物の見方が不十分だ。構図はよい。感じは紙面に溢れてゐる」と、構図と、画面から感じられる情感を評価している。

次に、評の書式について見ておきたい。「百灯画評」【冊子 2-b】は作品ごとに改行して上に△の印をつけて評を記しており、この書式は『椰子の実』発行前の回章【図版 3】で示した書式と共通している。「野の千草「評」」の続き【冊子 2-d】には同じく回章に「間にこま糸なども■■■■、入れるもよからう」【図版 2】と記していた篠遠の言葉を想起させる駒絵（カット）が散りばめられるなど、椰子の実会で作されたアイデアが活かされているように見える。

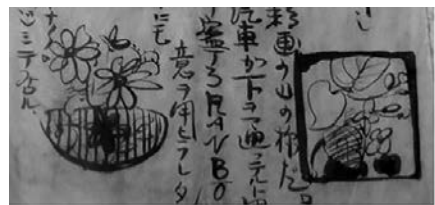
冊子2-b 「百灯画評」のページ (左) 及び部分的に拡大したもの (右)



冊子2-c 「野の千草「評」」のページ (左) 及び部分的に拡大したもの (右)

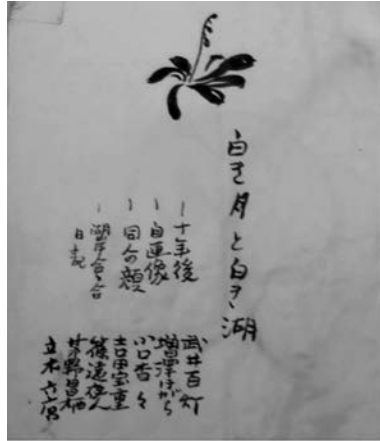


冊子2-d 「野の千草「評」」の続き (左) 及び部分的に拡大したもの (右)



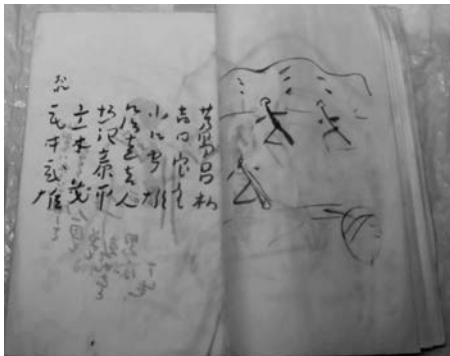
「野の千草「評」」のページ【冊子2-b】を見て分かる通り、『野の千草 一』に参加した武井以外の作者たちも、本名の代わりに号や落款で作者を示している。外部の者には誰がどの作品の作者なのかわからないが、冊子によってはある程度執筆者を把握できるものもある。例えば、『白き月と白き湖 草画集八 一湖岸会合一』の始めに記された参加者名【冊子8-a】のうち、立木、増澤（増沢）、篠遠は先の「椰子の実会規定」や回章【図版2】にも登場する名字である。

冊子8-a 『白き月と白き湖 草画集八 一湖岸会合一』より
文字のある部分のみ拡大



椰子の実会発行とは記さないものの、『白き月と白き湖 草画集八 一湖岸会合一』への参加者に椰子の実会会員が含まれていることから、この冊子を含む草画集の成立が、椰子の実会結成時の交友関係と関連していることが推測できる。さらに、1913年1月に制作された『白と春と 大正二年一月号 草画集第拾二』には、生徒たちの名前を書き連ねるページがあり【冊子9-a】、「椰子の実会規定」に名前の記されている増沢（増澤）、立木、武井、篠遠の4名が確認できる。

冊子9-a



確認できるうちで最も新しい冊子が1913年1月のものであることから、これらの草画集の発行は少なくとも卒業の年の1月まで続いている。「椰子の実会規定」の「会員は全力をあげて会の永続、外界よりの迫害破毀に務むべし」という一文を会員らが果たせたかどうか、限られた資料からは正確には分からないのだが、少なくとも、この会をきっかけに集った生徒たちが、絵を描き共に楽しむという活動を卒業の数ヶ月前まで継続していたことは確かである。

6. 終わりに

ここまで、椰子の実会関連資料及び同会との関連が考えられる冊子を見てきた。

会の機関誌『椰子の実』は「雑誌」と呼ばれていたが、印刷物ではなく手がきの一点ものである。これを共同で制作し、仲間間で回し読みすることで、絵を描く楽しみを分かち合う。そうした活動は、互いの作品について批評しあったり知識を共有したりすることに役立つだけでなく、友人同士の強い結びつきも作り上げていったと考えられる。判読し難い文字で書かれた文章や、仲間内だけで通じる呼び名や署名がわりの落款、記号など、読解を妨げる要素が満載された資料だが、それだけに、生徒たちの肉声が詰まっているとも言える。そして、親密な友人関係の中で生徒たちは美術趣味を養い、武井武雄のようにそのようなコミュニティを出発点として創作者への道を歩み始める者もある。彼らが具体的に何をどのように学んだかについては今後の課題とし、ひとまず本稿を終えたい。

註

- 1 『諏訪市史 下巻 近現代』（諏訪市史編纂委員会編纂、諏訪市役所、1976年）では明治後期の特色として、「体育面強化の行事が多くなったこと」が指摘されている（626）。同書によると1899年秋から明治末年頃まで野田原で諏訪連合小学校運動会が開催されたといわれ、この地域の17の小学校に通っていた尋常三年生以上の男女が参加したとのことである。また、1903年より諏訪中学校主催の郡内小学校野球大会が毎年開催され、1905年から諏訪湖でのスケートや水泳を実施する小学校が出、これも次第に盛んになっていた（627）。
- 2 椰子の実会に参加した生徒たちはその場の思いに任せて勢いよく字を書いていることが多いため、同会関連資料には判読不能の文字が多い。本稿では、引用の際に読めない文字は■で表し、仮名表記は原文ママ、旧字体は新字体に改めて表記する。
- 3 この回章に押されている「無事庵」という印だが、学制により諏訪郡内に設立された学校の中に、武井の祖父一三が開いた「無事学校」がある（諏訪教育会『諏訪史 第五巻』諏訪教育会、1986年）。武井の父慶一郎も私塾を開き、それは「無事庵」と呼ばれていた。この回章に押された「無事庵」の印が、椰子の実会の活動が武井の父慶一郎のお墨付きを得たことを示しているのか、それとも、単に文書作成の場所が武井家であったことを示しているのかは判然としない。

参考文献

『諏訪市史 下巻 近現代』 諏訪市史編纂委員会編纂、諏訪市役所、1976年
諏訪教育会『諏訪史 第五巻』 諏訪教育会、1986年（諏訪教育会蔵版）

資料の閲覧と撮影を許可し、調査にご協力くださったイルフ童画館の皆様と岡谷市に、心よりお礼を申し上げます。資料に含まれる難読字の読解に、芸術思想史家の木下長宏さんにご協力いただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。